

プロローグ

「船長！」

部下の絶叫に、このちつぽけな交易船の船長ヤン・タイロンは振り返った。その鼻先に、ぐいっと小さな生き物が突きつけられた。

「仕事と子守、同時になんてできません！」

「……………」

襟首をつかまれて吊り下げられた幼い息子を前に、タイロンは頭をかき、それから天を見上げた。といつてもそこに救いとなる亡妻の姿はなく、ただ味気ない天井が広がるばかりであった。

好奇心旺盛なこの息子のことだ。また船員たちを質問攻めにして、この荷揚げ荷おろしで多忙を極めている彼らに切れられた、というところだろう。

だがタイロンだつて困る。自分も暇なら一緒に壺を磨いていけばいいのだが、いまはそうではない。といつて、さすがに五歳児を一人で、高価な壺と一緒に置いておくのは危険すぎる。

「うーむ、わかった」

考えあぐねたタイロンはひよい、と息子の襟首をつまみ上げると、そのままずかずか廊下を歩いて船長室に放り込んだ。

「あいな、ウエンリー」

そして床にころん、と転がった息子に、かがみ込んでささやいた。

「父さんたちは惑星では忙しいんだ。宇宙に上がったらいくらで

も相手してやるから、ちよつとの間、ここの本でも読んでろ」

「ほん？」

息子はきよとんとなった。

「そうだ」

タイロンはにんまりと笑いかけた。

「おまえの訊きたがってた船の本も、亜空間の本も、昔の本も、なんでもあるぞ。本の中にはな、宇宙があるんだ」

じゃな、と息子の答えも待たずに父親は扉を閉めた。取り残された息子はぐるりと、自分を取り巻く本を見上げた。

「うちゅう……………」

そしてとりあえず、一番手近にある本を開けてみた。

「????」

……なんか、男の人と女の人がくつついている写真があるのだけど、どうしてはだかなんだろう？

「あー、しまった」

廊下を歩きながらあることを思い出して、タイロンは思わず呟いた。

「子供の教育によろしくないやつも、そのままだった……」